

原著論文

アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアン

Subject Librarians of College and University Libraries in the United States of America

山田 かおり

Kaori YAMADA

Résumé

Purpose: This paper describes the history, current situation and roles of subject librarians in college and university libraries in the United States of America.

Methods: First, through a review of the literature, the history of subject librarians and related experts in university libraries of the United States was clarified. Second, in order to examine the current situation and working circumstances of subject librarians, the websites of some university libraries were checked. More specifically, lists of subject librarians were found on websites and analyzed to compare their roles between types or categories of university.

Results: In the early days, subject librarians appeared in the United States to deploy the subject divisional plan and to promote area studies in universities. It became clear that the status of subject librarians had become well established by the 1960s as the task of selecting books shifted from faculty members to librarians, due to the postwar increase in the number of students and publications. The subject librarians usually were responsible for collection development, reference services, research consulting, library instruction, and liaison service. Since the 1980s, the selection of electronic resources, chat reference and so on were added as new tasks due to the appearance of the online environment and electronic resources. This survey found that the system of subject librarians has been adopted by most libraries at research universities, but small- or medium-size libraries tend to have liaison librarians serving only individual departments.

山田かおり：嘉悦大学情報メディアセンター，187-8578 東京都小平市花小金井南町 2-8-4

Kaori YAMADA: Information and Media Center, Kaetsu University, 2-8-4 Hanakoganei-minami-cho Kodaira-shi Tokyo, 187-8578

e-mail: yamada@kaetsu.ac.jp

受付日：2013年2月16日 改訂稿受付日：2013年9月22日 受理日：2014年2月2日

- I. サブジェクトライブラリアンとは
 - A. 政策文書に見るサブジェクトライブラリアン
 - B. サブジェクトライブラリアンの用語と定義
 - C. 日本におけるサブジェクトライブラリアンの紹介と研究
 - D. 日本におけるサブジェクトライブラリアンの事例
 - E. 本研究の目的
- II. アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアンの歴史
 - A. 調査方法
 - B. 導入経緯
 - C. サブジェクトライブラリアンの定着
 - D. 近年のサブジェクトライブラリアン
 - E. 役割の変化
 - F. 教育と必要とされる能力
- III. アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアンの現状調査
 - A. 現状調査の目的
 - B. 調査方法
 - C. 調査対象
 - D. 調査項目
 - E. 調査結果
- IV. まとめ
 - A. アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアンの特徴
 - B. 日本の大学図書館への示唆

I. サブジェクトライブラリアンとは

A. 政策文書に見るサブジェクトライブラリアン

日本においては1970年代以降に学術情報を巡るさまざまな政策文書が出された¹⁾が、その当時からすでに主題知識を持った大学図書館員の必要性が示されている。1973年に文部省学術審議会学術情報分科会より出された『学術情報の流通体制の改善について(報告)』において、学術情報の急激な増加に対応するための施策について述べられている。その中で大学図書館員については“大学における教育・研究の要請に応じ、その養成を的確には握し、情報サービスを提供する職務をもつものであることから主題分野における相当程度の知識と情報検索等の知識、技術を必要とする”²⁾と述べられている。その後も1980年の『今後における学術情報システムの在り方について(答申)』³⁾、1993年『大学図書館機能の強化・高

度化の推進について(報告)』⁴⁾、2006年『学術情報基盤の今後の在り方について(報告)』⁵⁾において、主題知識を持った図書館員の必要性について触れられている。

2010年12月に科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会より出された『大学図書館の整備について(審議のまとめ)』には、インターネットの普及に代表される社会全体における電子化の進展と学術情報流通の変化により、大学図書館を巡る環境は大きく変化してきており、電子化の進展や教育研究支援への積極的な関与など、現在の大学図書館を巡る状況を踏まえると、かつてのいわゆる図書館学的な専門性だけでは大学図書館職員としての対応が困難な状況があるとして、学習支援、教育への関与、研究支援において主題知識を持った図書館員が求められていると述べられている。しかし同時に、この文書は、その養成やキャリアパスに課題があ

第1表 Hay と Haskell が取り上げたサブジェクトライブラリアンを表す用語

Hay ⁹⁾	Haskell ¹⁰⁾
サブジェクトスペシャリスト サブジェクトビブリオグラファー プロフェッショナルスペシャリスト レファレンスビブリオグラファー ビブリオグラファー	サブジェクトスペシャリスト サブジェクトビブリオグラファー プロフェッショナルスペシャリスト レファレンスビブリオグラファー ビブリオグラファー
エリアスペシャリスト エリアビブリオグラファー サブジェクトエリアスペシャリスト	エリアスペシャリストビブリオグラファー セクター スペシャリストビブリオグラファー サブジェクトコンサルタント サブジェクトライブラリアン スペシャリストライブラリアン インフォメーションオフィサー リエゾンライブラリアン

るとも指摘している。我が国ではかつては教員がサブジェクトライブラリアンとしての役割を果たしてきたこともあったが、現状では少なくなってきたことから、大学図書館職員に対する期待が高まっている、と報告されている⁶⁾。

1970年代から政策文書において主題知識を持った図書館員の必要性が示されているが、大学図書館においてサブジェクトライブラリアンが定着しているとはいえない状況が続いている⁷⁾。しかし、近年の政策文書を見ると、サブジェクトライブラリアンについて触れられている箇所が増えており、サブジェクトライブラリアンに対する期待が高まっていることが窺える。

B. サブジェクトライブラリアンの用語と定義

1. サブジェクトライブラリアンを表す用語

サブジェクトライブラリアンはある特定の主題知識を持つ図書館員として知られているが、それを表す用語は一定していない。

イギリスにおけるサブジェクトライブラリアンを表す用語についての多様性は、呑海沙織がイギリスの大学図書館における調査を紹介しており、「サブジェクトライブラリアン」が中心として使われているものの様々な用語が使用されているとしている⁸⁾。

アメリカにおいては、Fred J. Hay⁹⁾と John D. Haskell, Jr.¹⁰⁾が、サブジェクトライブラリアンの同意語を列挙している。Hay および Haskell が取

り上げた用語を第1表に記載した。「サブジェクトスペシャリスト」「サブジェクトビブリオグラファー」「プロフェッショナルスペシャリスト」「レファレンスビブリオグラファー」「ビブリオグラファー」は共通であるが、それ以外に「エリア」「リエゾン」の用語が入ったものなど、様々な用語がある。

Hay はアメリカの図書館員に専門職としてのサブジェクトスペシャリストやビブリオグラファーを構成する明確な概念がないのは、様々な時代や場所において使用される標準的な用語が一致していないことが理由である⁹⁾と述べている。

近年の日本においては文部科学省の報告書である『学術情報基盤の今後の在り方について（報告）』⁵⁾や『大学図書館の整備について（審議のまとめ）』⁶⁾に使用されているように「サブジェクトライブラリアン」を使用することが多いようである。本論文においては、基本的には「サブジェクトライブラリアン」を使用し、文献からの引用や紹介の際はそれぞれの文献で使用されている用語をそのまま記載する。

2. サブジェクトライブラリアンの定義

1966年にオランダのハーグ市で開かれた IFLA 総会において Kenneth Humphreys は、「サブジェクトスペシャリスト」を“ある特定の主題分野において、図書館のテクニカルサービスあるいはレファレンスサービスを発展させるために任命され

た図書館スタッフの一員”¹¹⁾と定義しており、主題を中心にテクニカルサービスとパブリックサービスの両方を提供することを示している。

各種事典においても、特定の主題に関する知識を有する図書館員である、と定義され、その後、役割の説明が続く。例えば、『ALA 図書館情報学事典』(1988)では、「主題専門員 Subject Specialist」の項目において次のように定義されている。

ある主題もしくは学問分野に秀でた知識を有する図書館スタッフの一員で、当該主題領域における図書館資料の選択と評価に責任を有すると共に、ときには当該主題領域における情報サービスと資料の書誌的組織化にも責任を負うことがある。主題ビブリオグラファーと呼ばれることもある¹²⁾。

役割については少しずつ違った表現がされており、『*International Encyclopedia of Information and Library Science: 2nd ed.* (2003)では、“購入、蔵書構築、利用者へのサービスの仕事を含むことがある”¹³⁾と述べられており、『*図書館情報学用語辞典 第3版*』(2007)では、“その特定主題の資料管理、閲覧、貸出からレファレンスサービスなどを一元的に行う主題専門図書館員を指す”¹⁴⁾と述べられている。

最近では、2010年の文部科学省の『*大学図書館の整備について(審議のまとめ)*』の用語解説において、サブジェクトライブラリアンが次のように記載されている。

特定のサブジェクト(主題分野)における知識やスキルを活かして、当該分野のレファレンスやコレクション構築等に係る業務を担当する図書館職員のこと。図書館業務における専門性と特定のサブジェクトに関する専門性の両方が要求される⁶⁾。

サブジェクトライブラリアンには様々な定義があるが、主題を中心に、資料選択、蔵書構築等の

テクニカルサービスと、情報サービス、レファレンスサービス等のパブリックサービスの両方の業務を行う図書館員とも言える。本研究では、サブジェクトライブラリアンを「特定の主題に関する知識を持ち、主題に関するテクニカルサービスおよびパブリックサービスを行う図書館員」ととらえ、考察を行う。

なお、第1項のサブジェクトライブラリアンを表す用語で取り上げたりエゾンライブラリアンについては、別に定義される場合がある。『*Dictionary for Library and Information Science* (2004)では、リエゾンとサブジェクトスペシャリストの用語が説明されている。

liaison (リエゾン)

大学図書館において、教員と図書館員との間の仲介人として支援するために、図書館員は1つまたはそれ以上の学科を担当する。リエゾンの責任には文献利用指導、蔵書構築(参考図書や電子資料を含む)、カレントアウェアネス、図書館資料の利用における教員の指導が含まれることがある。多くのリエゾンライブラリアンは担当する分野の学術的素養または少なくともある程度の専門知識を持つ¹⁵⁾。

subject specialist (サブジェクトスペシャリスト)

資料の選択、専門的な主題分野または学問分野の利用者への文献利用指導やレファレンスサービスを提供する、専門的知識や経験を持つ図書館員。大学図書館においては、サブジェクトスペシャリストはしばしば専門分野において二つ目の修士号を持つ¹⁶⁾。

この説明によると、職責においてはリエゾンライブラリアンとサブジェクトライブラリアンにはほとんど違いはないが、具体的に教員との仲介人としての役割を持つのがリエゾンライブラリアンであり、主題の専門的な知識が強調されているのがサブジェクトスペシャリストであるといえる。本論文では、担当する学科の教員との仲介人の役割

を担う図書館員について取り上げる際はリエゾンライブラリアンという名称を用いて、サブジェクトライブラリアンとは別に扱う。

C. 日本におけるサブジェクトライブラリアンの紹介と研究

1966年のIFLA総会¹¹⁾に日本から参加した藤田豊が、National and University Libraries部会で紹介されたサブジェクトスペシャリストの内容を1967年の『図書館雑誌』に紹介し、急激に増大する出版物や急増する大学生に対応するために日本でも必要であり、養成制度改革および現職研修が重要であると述べている¹⁷⁾。

その後、サブジェクトライブラリアンに関する記事や論文が断続的にはあるが、様々な雑誌に登場している。サブジェクトライブラリアンについて論じる際には、藤田と同様に英米の研究や事例が多く取り上げられている。また、2004年以降は、国立大学法人化を背景とした、サブジェクトライブラリアンの必要性について述べられたものが見られる。

英米のサブジェクトライブラリアンに関しては、菊池しづ子が英米におけるサブジェクトライブラリアンの定義と役割について概説し、特に資料選択とレファレンスサービスについて詳細に述べている¹⁸⁾。加藤修子は、英米の主題専門図書館員と主題専門教育のレビューを行い、主題専門図書館員の役割については主にイギリスについて取り上げている¹⁹⁾。日本におけるサブジェクトライブラリアンに関する文献では、イギリスについて取り上げられることが多く、及川三千男はランカスター大学とブラッドフォード大学の事例をもとに役割や組織の中での位置付けについて述べている²⁰⁾。斎藤陽子はイギリスの大学図書館における主題専門制についてレビュー形式で取り上げ、主題専門図書館員についても触れている²¹⁾。呑海沙織は、数回に渡りイギリスのサブジェクトライブラリアンについて取り上げており、イギリスの図書館員制度について述べた上でサブジェクトライブラリアンの定義や役割、類型について概説し⁷⁾、また、役割の変化について論

じている⁸⁾。

大学図書館関連の図書においては、1992年の岩猿敏生他の『大学図書館の管理と運営』にて英米での主題専門司書の導入経緯について述べられている²²⁾。また松林正己は、研究図書館に関する図書の中で、主題専門家についてインタビューした内容を中心に詳しく説明している²³⁾。

英米の事例を取り上げた論文の結びには、日本における導入の必要性や可能性について述べられているものも多い。藤田¹⁷⁾や加藤¹⁹⁾は、主題専門知識は必要であるが、養成制度や雇用体制がないことが障害になっていると述べており、及川²⁰⁾は学生の利用指導のためにサブジェクトライブラリアンが必要と結んでいる。

しかし、2004年の国立大学法人化により、必要性についての論調が多少強まった感がある。2004年4月の国立大学が法人化に先立って、2003年11月に開催された国立大学図書館協議会によるシンポジウム「国立大学法人化後を見据えた大学図書館経営について」において、笹川郁夫は“サブジェクトライブラリアンを目指すことも課題”²⁴⁾と報告している。また有川節夫は、欧米においてはサブジェクトライブラリアンが十分に配置されているが、日本では十分に機能しているとはいえず、“この問題に真摯にしかも緊急に取り組まなければ、研究者や学生から信頼される大学図書館としての発展は望めない”²⁵⁾と述べている。長坂みどりも京都大学の人事制度の基本的方向性として“情報社会の変化等に対応できる高度の専門性を持った図書館職員(=サブジェクトライブラリアン)の育成”²⁶⁾が挙げられていることを報告している。

呑海は選考・採用、評価、報酬、養成・研修をキーワードとして人的資源管理の観点から日本における導入を検討しており、最後に人事制度に触れ、“ジェネラリスト養成の観点でなされている人事異動において、研究主題を追求するサブジェクト・ライブラリアンは存在しえないのではないだろうか”⁷⁾と述べ、導入の困難さを指摘している。しかし、“電子メディアを含む図書館資料の選択、コレクション構築、一般教養以上のレ

ファレンス・サービス、主題に特化した情報リテラシーは主題知識なくして行うことはできない”ので、大学図書館においてはサブジェクトライブラリアン設置について検討する必要がある⁷⁾と、サブジェクトライブラリアンの必要性を強調している。また呑海は、“学術情報プロフェSSIONALを語る上で、サブジェクト・ライブラリアンの確立は避けて通れない。さもなくば、大きな地殻変動の狭間で、大学図書館は呆然と立ち尽くすに違いない”²⁷⁾と強く主張しており、私立大学図書館協会の研究講演会においては、情報リテラシー教育において主題知識が必要であり、サブジェクトライブラリアンが必要である²⁸⁾として、サブジェクトライブラリアンの導入についての検討を促している。

2005年には『情報の科学と技術』において「サブジェクトライブラリアンは必要か」という特集が組まれている²⁹⁾。サブジェクトライブラリアンが必要か不要かという議論が主ではなく、大学図書館、法律図書館、医学図書館、企業図書館、公共図書館の事例から、それぞれのサブジェクト（主題分野）に対しての位置づけ、方向性、課題等を考察している。

D. 日本におけるサブジェクトライブラリアンの事例

日本においてもサブジェクトライブラリアンが全く存在しなかったわけではない。岩猿は次のように述べている。

日本の大学図書館でも、戦前から医学・薬学・法学等の学部図書館では、それぞれの分野の優れた主題専門司書を生み出したことがある。しかしそれは、本人の努力と資質によって可能であっただけで、制度として育ってきたわけではない。そのため優れた主題専門司書であっても、それにふさわしい待遇が与えられることもなかったし、後継者を育てることも困難であった²²⁾。

この後、今日の状況に触れ、現場には主題専門

司書と呼ぶべき図書館員がいるが、官僚制構造をとる日本の大学図書館ではふさわしい待遇をする途が開かれていない²²⁾、としている。

松林も日本でも戦前から戦後の数年は司書官という地位が存在しており、職責は選書や目録であり、また東京大学総合図書館や早稲田大学図書館ではこの学者タイプの図書館員が1980年代までは存在した、と述べている²³⁾。

櫻田忠衛も、経済資料協議会での『経済学文献季報』『経済学文献索引データベース』の編集や『経済資料研究』の刊行等により、ドキュメンタリストとしてサブジェクトライブラリアンの活動をしている者がおり、サブジェクトライブラリアンは存在する³⁰⁾と主張している。

また、医学図書館や法学関係の図書館では、主題知識を活かした業務を行っている。『情報の科学と技術』のサブジェクトライブラリアンの特集において、諏訪部直子はEvidence-Based Medicine等の医学界の動向を説明し、医学図書館員育成の方法として、日本医学図書館協会の研修会やヘルスサイエンス情報専門員資格認定等、各種図書館協会の研修会や、自発的な勉強会や研究会等を挙げている³¹⁾。加藤裕子は法律研究所において、選書やデータベース選択、教育IT環境の整備、教育支援ソフトの立ち上げ等に専門分野の知識を生かした例を紹介した³²⁾。

図書館員以外がサブジェクトライブラリアンを担当している事例がある。金沢工業大学では1982年からサブジェクトライブラリアンが制度化されているが、教員がサブジェクトライブラリアンを担当しており、14学科ある各分野の専任教員が、図書館レファレンスカウンターや学習支援デスク、ライティングセンターにオフィスアワーを設けて配置されている。利用者支援、蔵書構成計画立案、選書なども行っている^{33), 34)}。また2007年度より一橋大学で専門助手をサブジェクトライブラリアンとして配置している^{35), 36)}。

日本においては、戦前から戦後の数年や、専門分野を支援する図書館や研究所等、ある一定の期間や一部の図書館ではサブジェクトライブラリアンに値する業務を行っている図書館員が存在する

が、ほとんどの図書館ではサブジェクトライブラリアンが制度としては確立していない、と言えるだろう。

しかし最近では、千葉大学において学生・教員との連携をメインにしたリエゾンライブラリアン制度³⁷⁾や、九州大学のライブラリーサイエンス専攻においてサブジェクトライブラリアン養成³⁸⁾が組み込まれる等の動きがある。

E. 本研究の目的

日本においてサブジェクトライブラリアンが紹介されてから50年を経過しようとしており、今までに様々な形でサブジェクトライブラリアンが取り上げられてきた。実際にサブジェクトライブラリアンが存在している例もあるが、定着しているとは言い難い。多くの論文や政策文書では、主題の知識を持った図書館員であるサブジェクトライブラリアンが必要である、という主張がなされている。しかし、近年の議論においては、図書館員の専門性確立のために、サブジェクトライブラリアンの導入ありきで議論が進められているきらいがある。また、高度な図書館サービスの提供には主題の知識が必要であり、サブジェクトライブラリアンが必要である、という必要性を主張する段階であり、サービス内容についての掘り下げた議論はなされていない。これについては、薬師院が、近年、大学図書館においてサブジェクトライブラリアンが注目を集めたのは、国立大学法人化により、国立大学図書館員はこれまで以上に専門職として雇用されることの意義を訴えなければならなくなったことと無縁ではない³⁹⁾と述べている。また櫻田は、最近の議論が、“制度や組織、とくにその地位を確保することを最大の目標にして、現在進みつつある大学への競争原理、効率化の導入に乗り遅れずに、むしろそれらを逆に利用して図書職員の地位を確保しよう”としており、内容についての議論がなされていないところが欠陥である³⁰⁾と指摘している。

そこで、日本では定着していないサブジェクトライブラリアンが、英米ではどのように導入され、定着し、今に至っているのかという点に着目

した。英米でサブジェクトライブラリアンが定着しているのは、利用者である教員や学生、設置母体である大学やその回りの社会からの要請による、確固たる導入背景や定着した理由があり、今もって重要な役割を果たし続けているからではないかと考えられる。また、今後本格的にサブジェクトライブラリアンの日本での導入を検討するのであれば、サブジェクトライブラリアンの役割や、各大学での普及状況、人数、分野数等の規模、サブジェクトライブラリアン個人の経歴や所属部署等の導入の状況について明らかにする必要がある。

イギリスにおける導入の背景は、呑海の文献において、1940年代後半から1950年代にかけて、第二次世界大戦中に失われた、あるいは散逸した蔵書を再構築するために多くのサブジェクトライブラリアンが必要とされた、と述べられており、その後の推移や役割についても明らかにされている⁸⁾ので、本研究では触れない。

アメリカでの導入の背景については松林²³⁾の著書に詳しいが、内容がインタビューを中心としたものである。初期の役割については菊池¹⁸⁾が詳しく述べているが、導入経緯については取り上げられていない。また、サブジェクトライブラリアンの普及状況や導入の状況については明らかになっていない。

そこで、本研究では、アメリカのサブジェクトライブラリアンの導入経緯と定着の理由、その後の推移を調査し歴史的経緯を明らかにすること、サブジェクトライブラリアンの役割および、普及状況や導入状況を明らかにすることを目的とする。サブジェクトライブラリアンが注目されている現状において、アメリカのサブジェクトライブラリアンの歴史的推移、詳細な役割や導入状況を踏まえることは、日本におけるサブジェクトライブラリアンの必要性の議論だけでなく、導入の可能性や日本に適した体制やサービス内容など、より深い議論をするためには意義がある。

調査は、アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアンの歴史的推移および、現状調査の2本立てで実施する。

アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアンの導入経緯、その後の推移、役割については、文献調査により明らかにする。現在の導入状況については、各大学の Web サイトを確認する方法を取った。各大学図書館の Web サイトに掲載されているサブジェクトライブラリアンリストを元に、名称、人数、分野数、役割等の導入状況や、地位、部署、経歴等の個人の情報を調査した。

II. アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアンの歴史

A. 調査方法

アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアンに関する既存レビューとしては、Haskell¹⁰⁾と Hay⁹⁾の文献がある。これらの文献はサブジェクトライブラリアンの導入期から1970年代までの歴史的推移について書かれている。これらの文献に表されている歴史的推移を元に、適時背景を追加して導入経緯や定着の理由、その後の推移を明らかにする。その中でも特に役割の変化に注目する。1980年以降の動向については、図書館情報学関連のデータベースであるLISA (Library and Information Science Abstracts) および Library, Information Science & Technology Abstracts (LISTA) を用い、主に「subject specialist」「subject librarian」「liaison librarian」をキーワードに検索し、文献を収集した。

B. 導入経緯

アメリカの大学図書館におけるサブジェクトスペシャリストは、最初は分館や部局図書館の図書館員であった。しかし、その多くはジェネラリストであり、主題分野の知識に乏しく、基本的に管理スタッフとして最低限のサービスを行っていた⁴⁰⁾。1920年頃までは、ハーバード大学やコロンビア大学などいくつかの例外はあったが、多くの部局の図書館は部局に属するものとしてさまざまな運営が行われており、図書館学と特定主題について有能な職員をみつけだすことは困難であった⁴¹⁾。

Russell Duino は、サブジェクトスペシャリストの大学図書館への導入にはいくつか方法があるが、その1つは主題部門制におけるサブジェクトライブラリアンであると、述べている⁴²⁾。主題部門制は、増加する部局図書館を管理するために、部局図書館を統合して進められた。人文科学、社会科学、科学技術というように、単一の主題より広い分野によって分けられたものであり、ブラウン大学やコロラド大学で始められ、1930年代後半に発展した⁴³⁾。

Robert B. Downs は1946年に、主題と図書館学の両方の知識を持ったサブジェクトライブラリアンが必要である⁴⁴⁾と述べている。

1949年にシカゴ大学図書館長であった Herman H. Fussler は、人文科学、社会科学、物理学、生物科学のような広い主題分野でのビブリオグラファーの、蔵書管理における重要性について述べている。教員の選書は自身の研究テーマによって偏りが生じがちであるが、主題分野の専門書や多くの言語における図書の購入は、教員が持つ高い専門知識を必要とする。ビブリオグラファーはより広い主題分野を扱い、一般的な方針作成への助言や教員の活動を促進することができる。研究や文献の増大や複雑化により研究図書館の重要性が増し、図書の購入の問題も複雑になっている。そこで教員と図書館員の利用可能な能力を使い蔵書構築をすべきであるとしている⁴⁵⁾。

1950年までには、ネブラスカ大学図書館で主題部門制を取り入れ、人文科学、社会科学、科学の主題の専門家を雇った。John D. Capmanによると、ネブラスカ大学での部門図書館員の職責は、図書選択から管理にまで及ぶ。彼らの仕事の多くは図書館と教育および研究部門とのリエゾンとしての支援であるため、助教 (Assistant Professor) としての役割が重要とされた⁴⁶⁾。

1960年までには、ほとんどの主要な大学図書館には何人かのサブジェクトビブリオグラファーが存在し、多くが主題部門制を採用していた⁹⁾。

一方、Hay は、アメリカの大学図書館にサブジェクトビブリオグラファーが導入された契機は、第二次世界大戦であるとしている⁹⁾。地域研

究とエリアスペシャリストビブリオグラファーについては、Robert D. Stueartが詳しく述べている。第二次世界大戦によって地域研究プログラムが開始されたが、1958年のスプートニクの打ち上げで大きく推進した。1958年より、大学図書館の地域資料への政府からの支援が始まり、Stueartの調査によると1970年には109の地域研究プログラムにエリアスペシャリストビブリオグラファーが配置されていた⁴⁷⁾。Hayは、地域研究のビブリオグラファーは必然的にサブジェクトビブリオグラファーとなり、地域研究以外のサブジェクトビブリオグラファーが雇われるようになった⁹⁾というが、この説については、Hay以外の文献には見当たらなかった。

C. サブジェクトライブラリアンの定着

Haskellは1960年代にサブジェクトビブリオグラファーの概念と利用が確立したとしている。1966年に米国大学・研究図書館協会(Association of College and Research Libraries: ACRL)のサブジェクトスペシャリストセクションが設置され、1967年には約2,200名のメンバーがいたという¹⁰⁾。

インディアナ大学では1963年より3年間で、社会科学、人文科学、地域研究プログラムに10分野(人類民族社会学、政治経済、英語、歴史、現代外国語、アフリカ研究、近東研究、極東研究、ラテンアメリカ研究、ロシア・東欧研究)のサブジェクトスペシャリストを置いた。1人のサブジェクトライブラリアンが、2またはそれ以上の分野を担当した。サブジェクトスペシャリストは、資料選択、教員や大学院生へのレファレンスサービス提供、図書館利用教育、図書館と部局とのコミュニケーションチャンネルとしての支援を行った。これらの分野における文献や専門的なレファレンスツールの急速な増大は、スペシャリストの援助なしに大学教員や大学院生の特別なニーズを満たすことは不可能であった。サブジェクトライブラリアンの仕事の多くは資料選択である。彼らはその分野についての教育を受けることや日々の業務により、その分野の文献についての知

識を維持した。サブジェクトライブラリアンの雇用において、インディアナ大学では、主題と図書館学両方の学歴を求めているが、言語と主題についての能力を持っていれば図書館学の学歴は要求しない。しかしながら、インディアナ大学の10人のうち8人は図書館学の学位を持っていた⁴⁸⁾。

J. Periam Dantonは1960年代に選書の役割が教員から図書館員に移った経緯について詳しく述べている。アメリカにおいては、おおむね図書の選択は教員によってなされていた。サブジェクトスペシャリストは主に目録、分類、レファレンスを行うために雇用されていた。しかし、世界的な出版数の急激な増加や複雑化、図書館の蔵書の増大は教員の選書者を当惑させ、時間のない多くの教員は図書の選書から離れていった。アメリカの部局図書館では、教員から部局図書館へ選書権が委任され、図書館員によってかなり多くの図書が選択された。しかしながら、部局図書館の蔵書は、大学全体の図書資料のごく一部であり、一般教養、人文学、歴史、社会科学のメインコレクションの図書選択は、主として教員達の責任で実行されていた⁴⁹⁾。

コロンビア大学、コーネル大学、ハーバード大学、インディアナ大学、ミシガン大学、スタンフォード大学、ワシントン大学の各図書館は、1960年代に、図書館スタッフの手に図書選択の責任が正式に移り始めた。ハーバード大学の60人の図書館員は、部分的に図書の選択に参加した。インディアナ大学は、14人の図書館員が、彼らの時間の70%程度を選書に費やした。また、カリフォルニア大学ロサンゼルス校には、ビブリオグラファーと呼ばれる9名のスペシャリストがおり、主題ではなく地域分野(南アメリカ、中東、東欧、極東など)の図書選択に専念していた。集中的な研究や図書の購入のために、スペシャリストが毎年その地域に派遣された。そして、購入図書の85%が図書館員によって選択された⁴⁹⁾。

Dantonは、サブジェクトスペシャリストはその分野の蔵書の強みと弱みを知り、教育プログラムやニーズに合ったバランスの良い蔵書を構築す

るという方針で働いているので、アメリカの大学はサブジェクトスペシャリストの図書選択プランを取り入れるべきであると主張した⁴⁹⁾。

図書館員が図書選択を行うことに対する教員との対立は存在し続けるかもしれないが、インディアナ大学やカリフォルニア大学ロサンゼルス校での図書館員の支援は、教員が選書の役割を手放そうとしていることを示している。Robert P. Haro は1969年の論文で述べている。教員との連携や信頼を得るには、図書館員の専門における学歴が必要であり、図書館学の修士号以外に主題における学士号以上の学位と外国語の習得がビブリオグラファーの地位を有利にするとしている⁵⁰⁾。また、“本当の、効果的なビブリオグラファーは、単なる図書選択者ではない。彼は上級のレファレンス・ライブラリアンであり、研究者であり、図書館利用の指導者であり、図書館と部局との間の重大なコミュニケーション・リンクであり、学生の友人である”⁵⁰⁾と述べている。

しかしHaroが主張する役割に対してHelen Welch Tuttleは“彼のビブリオグラファーは少なくとも五つ子でなければならないだろう”⁵¹⁾と1人のビブリオグラファーがHaroの言う幅広い役割を十分に行うことは不可能であると述べている。Tuttleは、選書には教員の専門知識を活用すべきだとしている⁵¹⁾。

また、Archie L. McNealは、主題部門制に変更された途端にジェネラリストのレファレンススタッフがサブジェクトスペシャリストになった例を挙げ、サブジェクトスペシャリストの必要性は認めるが、ジェネラリストとして養成された専門職の図書館員に、専門家としての正当性を与えるために使っていると述べている⁵²⁾。しかし、Ann CoppinはMcNealの考え方は消滅するべきであるし、消滅しつつあるとしている⁵³⁾。

実際にHaroは1967年の論文において、蔵書数が30万から100万冊の大規模な大学図書館における図書選択に関する調査結果を公開している。調査対象とした70館のうち67館から回答があり、そのうち62館が図書館において選書を実施しており、多くの大学図書館においては図書館

員が図書選択に従事することに同意していると述べている。特に蔵書数50万冊以上の大学図書館では、選書者の69%がテクニカルサービスまたは館長や副館長直属のビブリオグラファーまたはサブジェクトスペシャリストであった⁵⁴⁾。1960年代後半には、大規模大学図書館の大半で図書館員が選書の役割を担っており、その多くはサブジェクトライブラリアンが担当していることが示された。

このように1960年代は、出版数の急激な増加と複雑化などの要因により、教員からサブジェクトライブラリアンへ図書選択の役割が移ることによって、サブジェクトライブラリアンが普及した。

1970年代も1960年代と同様の傾向が続いた¹⁰⁾。1950年代から1970年代はビブリオグラファーの「黄金時代 (golden age)」⁵⁵⁾と言われている。

サブジェクトライブラリアンについての論文は大規模図書館について書かれたものがほとんどであるが、中小規模の大学図書館の役割について書かれたものもある。Selby U. GrattonとArthur P. Youngは、大規模図書館に存在するビブリオグラファーが中小規模のカレッジにおいても必要であると述べている。カレッジではレファレンスと選書の義務がほぼ同等であるレファレンスビブリオグラファーを3,4人置くべきであるとして、実際にニューヨーク州立大学コートランドカレッジの例を紹介したが⁵⁶⁾、多くのカレッジライブラリアンはこの問題を真剣に考えなかった⁹⁾。Frederic M. Messickは、大規模図書館では通常サブジェクトライブラリアン1人につき1～3分野の主題を担当しているが、中小規模図書館では1人でより多くの分野を担当することになるといふ。また教員とのリエゾンが重要であり、効果的な蔵書構築には、教員の選書や、一括発注プランの利用が有用であるとしている⁵⁷⁾。

D. 近年のサブジェクトライブラリアン

1980年代の景気は、1960年代および1970年代とは違い低迷していることは確実であり、効率化や機械化への対応が必要であることが指摘され

た¹⁰⁾。D. W. Dickinson は1979年の文献において、サブジェクトライブラリアンをかなり強く否定している。これまでの図書館員によって書かれた図書選択の発展についての記述には、予算や蔵書の拡大、地域研究プログラムの開始、選書を行う教員の図書館員による補佐や選書業務の図書館員へのシフト、バランスの取れた蔵書構築などの要素が強調されているが、これらはビブリオグラファーやサブジェクトライブラリアンの必要性の説明のためであり、サブジェクトスペシャリストの有効性を断言するにも関わらず、効果的に働いていないと述べている。サブジェクトスペシャリストの主題における専門知識の不足、機能別組織である図書館組織におけるビブリオグラファーの地位の互換性のなさ、バランスが取れた蔵書の必要性への疑問、広い主題領域をカバーすることが不可能であることにより、サブジェクトビブリオグラファーが不要になると主張した。一括発注や見計らい、大学出版におけるオンデマンド出版への関心の増加、発生したばかりであるが着実に発展している図書館協力システムにより、図書館員による選書システムが変化する。このような状況では、サブジェクトスペシャリストはほんの一部しか必要ではなくなる。環境の変化により、サブジェクトスペシャリストは徐々に不必要なものになるかもしれない、と述べた⁵⁸⁾。また、財政的な苦難は多く、資料費（特に学術雑誌）の段階的な増加、出版点数の継続的な増加と高価な電子メディアの爆発的な発展は、すでに逼迫した収支予算への圧迫を増やそうとしている⁵⁹⁾。アグリゲータ系電子ジャーナルの購読やコンソーシアム協定により、図書館員による選択の機会が減少し、サブジェクトスペシャリストの役割も減少すると言われており⁶⁰⁾、実際にサブジェクトリエゾンの制度を再構築し、スタッフを削減する事例も見られるようになってきている⁶¹⁾。

このような状況の中、近年のサブジェクトライブラリアンの設置に関する調査がなされている。例えば、1992年に外部情報源の増加によるリエゾンの役割の変化を調べるために北米研究図書館協会（Association of Research Libraries: ARL）

にて実施された調査がある。この調査では49館（回収率47%）から回答があり、回答したすべての図書館でリエゾンの役割を持つ図書館員を雇っていた⁶²⁾。2007年の追跡調査においても、66館（回収率54%）から回答があり、大学図書館のうち1館以外はすべての図書館でリエゾンサービスを提供していた⁶³⁾。

技術の変化により、サブジェクトライブラリアンの存在が危ぶまれたが、リエゾンサービスから見る限り、現在においても多くの大規模図書館でサブジェクトライブラリアンが設置されている。

E. 役割の変化

1950年から1970年代後半までのビブリオグラファーとコレクションの隆盛は、大学の拡張、学術の多様化、印刷体に基づいた学問等が合わさった状況によるものである⁵⁵⁾。1980年代以降は、機械化やインターネット、電子ジャーナルの普及により学術コミュニケーションに変化が起き、サブジェクトライブラリアンの役割に変化が現れた。

1. 1970年代まで

目録、分類、レファレンスが当初からの役割であったが、1960年代に選書の役割が教員から図書館員に移る⁴⁹⁾ことにより蔵書構築の役割が加わった。サブジェクトライブラリアンの役割には、他にも、図書館利用指導、リエゾンが挙げられている^{40), 42), 64), 65)}。

その中でも蔵書構築が重要視されており⁶⁴⁾、資料の選定に最も多くの時間を使うという記述がある¹⁰⁾。この中で、教育や研究の目的に必要なもっとも効果的な図書や資料を入手し、可能な限りバランスの良い蔵書を保つことが必要とされていた⁶⁴⁾。また、その職責には、最近の資料を選択するだけでなく、過去に刊行された資料の購入や資料保存、不要資料の選択、資料のマイクロフィッシュ化や製本等の判断、特に地域担当の図書館員は資料購入のための外国との交渉も含まれる⁶⁵⁾。

レファレンスサービスは主題知識を持った図書

館員によって、よりよいサービスを提供することができる⁵³⁾。また、蔵書を最大限利用するために、レファレンスサービスだけでなく、図書館や文献の利用指導を行う⁴⁰⁾。

これらのサービスを行うにあたって重要視されているのはリエゾンの役割である。1960年頃、蔵書構築と収集予算の管理が教員から図書館員にシフトしたときに、教員と図書館の密接な関係がリエゾン関係の育成を通じて発展した⁶²⁾。利用者への図書館の売り込みが重要であり、部局の委員会への参加や、図書委員長の教員との交流等、公式および非公式の会合を通じて教員や学生と直接関係する。その分野の教育プログラムや、教授会や委員会に参加することにより、教員との間に強力なリエゾンの役割を果たすことができる^{53), 64), 65)}。

また、いくつかの大学では、目録や分類作成の補助をし、主題に関する目録の方針形成などを行った¹⁰⁾。

2. 1980年代以降

1980年代以降もサブジェクトライブラリアンの主な役割は、蔵書構築、レファレンス、図書館利用指導、リエゾン、目録や分類であったが、オンライン化や電子情報源の登場により、今までの役割に新しい技術や媒体に関するものが加わるようになった。

サブジェクトライブラリアンは、語学力や学術コミュニケーションシステム、情報市場を熟知した上での主題知識を持っているので、データベースや電子ジャーナル選択を含む蔵書構築において中心的な役割を果たし続けるという^{55), 66)}。学術雑誌の価格高騰に対するコンソーシアム協定等のプログラムにおいてもサブジェクトライブラリアンが必要とされる^{55), 66)}。Jeanie M. Welchは、ビジネス定期刊物のコレクション評価においてケーススタディを実施し、主題分野のコアタイトル知識を保有すること、印刷体と電子媒体の両方を見渡すことができること、教員や学生の研究、教育ニーズを熟知していることなどから、電子アクセス環境においても、サブジェクトスペシャリ

ストは貴重な役割を果たすことができると述べた⁶⁰⁾。

レファレンスサービスにおいても、様々なメディアや形態の情報や、幅広い資料の知識を持つサブジェクトライブラリアンのサービスが必要とされる⁵⁵⁾。Feldmannは技術の発展によるレファレンスサービスの提供方法の進展に注目した。オンラインチャット、メール、インスタントメッセージ(IM)、ブログ、ポッドキャスト、Wiki等の多数のプラットフォームを提供することにより、様々な利用者の質問に即時に対応できる。Feldmannは、提供方法に変化があってもレファレンスサービス自体は以前と変わらず残ると言及している⁶⁶⁾。

また、利用者が印刷体やWebサイト、データベース等多数の形式の情報から必要な情報を見つけるためには、サブジェクトライブラリアンによるチュートリアルやサブジェクトガイドの作成、インターネットやデータベースの検索においてだけでなく著作権や倫理問題の授業を持つことが必要になるとの指摘がある⁶⁶⁾。

1992年および2007年にARLにおいてリエゾンサービスの調査が実施され^{62), 63)}、また1992年、2001年、2010年にリエゾンワークのガイドラインが作成される^{67), 68), 69)}など、近年はリエゾン機能にさらに注目が集まっている。リエゾンサービスの対象者の中心は教員であるが、大学院生、職員、学部生も含まれ、少数であるが学外者も含まれる⁶³⁾。また、リエゾンサービスの担当者の多くはパブリックサービスの図書館員であった^{62), 63)}。サービスの提供方法としては、部局の会議への参加や新任教員へのオリエンテーションなど、教員と直接関係することは以前と変わりが無いが、2007年の調査では電子メールでの情報提供が最もよく利用される方法となり、Webページでのお知らせ、ブログなどが加わった⁶³⁾。また同調査では、ほとんどの大学がキャンパス内のすべての学科にリエゾンを置いていた⁶³⁾。

F. 教育と必要とされる能力

サブジェクトライブラリアンの教育や学歴に

については古くから議論されている。1946年にDownsは、サブジェクトライブラリアンには主題と図書館学の両方の教育が必要であるが、ライブラリースクールがそれに対応していないと述べ、一般の図書館員をサブジェクトスペシャリストに転向させるよりは、主題の専門家を図書館員に転向させるほうが適切であると述べている。大学図書館員のサブジェクトスペシャリストを養成するために、ライブラリースクールでのコースやインターンシップを提唱した⁴⁴⁾。Cecil K. Byrdも主題の能力を持っていれば、図書館の知識は要求しないと言っている⁴⁸⁾。

DownsとByrdは主題の知識を重要視していたが、その後は図書館学の学位が必要という説が多く見られる。

1956年のFrank A. Lundyのネブラスカ大学の部門図書館(divisional plan library)の論文では、部門図書館のスタッフは図書館学と主題分野の能力が必要とされ、図書館学の修士号は必須であり、その部門の主題に関する修士号取得が望ましい⁷⁰⁾とされている。

サブジェクトライブラリアンの望ましい学歴についてはCoppinが詳しく述べている。Coppinは主題の学士号に加えて図書館学の修士号を持つべきであるとしている。この組み合わせは伝統的に機能的な方向性に沿って組織された図書館にサブジェクトライブラリアンを適切に供給できた。最適なのは主題領域の学士号と修士号の両方と、図書館学の修士号を持つことである。多くの同僚の図書館員が図書館学の修士号を持っていない図書館員を受け入れないので、図書館学の修士号は必要である。主題の博士号と図書館学の修士号取得については問題が生じやすい。博士号の取得にお金も時間もかけた学者に、研究の設備や時間の確保が困難な環境において、図書館の業務にやる気を起こさせるのは難しいと述べている⁵³⁾。

1990年代にサブジェクトライブラリアンの地位を調べるために求人広告や職務記述書を分析する調査が見られた^{59), 71), 72)}。これらの調査ではほとんどすべての求人広告において図書館学修士号(Master of Library Science: MLS)およびそ

れに相当するものが必要とされていた。主題について特に要件に入っていないものから、学士号、修士号、博士号、特定の分野に関する学術的な経歴、保有する知識や経験等の様々な組み合わせが指定されており、John Haar⁵⁹⁾およびGary W. White⁷²⁾の調査では約80%で主題の学位や知識が必要とされていた。

2005年のSonja L. McAbeeとJohn-Bauer Grahamが職務記述書やアンケートを分析した結果においても98%がMLSを取得しており⁷³⁾、現在においてもサブジェクトライブラリアンにとってMLSは必要な学位とされている。

他に必要な能力として、Kristine K. Stacy-Batesらは、コミュニティや組織の中での図書館の知識、効果的な時間管理やスキル開発の方法、蔵書構築、主題知識、予算、資料選択や廃棄、リエゾンとしての効果的なコミュニケーション等の能力を挙げている⁷⁴⁾。

III. アメリカの大学図書館における サブジェクトライブラリアンの現状調査

A. 現状調査の目的

本調査では、アメリカの大学図書館における現在のサブジェクトライブラリアンの状況を把握することを目的とする。第II章で取り上げたサブジェクトライブラリアンに関する文献のほとんどは、大規模大学図書館について書かれたものであった。中小規模大学図書館においてもサブジェクトライブラリアンの必要性がうたわれているが、実際の導入状況については把握できていない。そこで、アメリカの大学図書館全体での導入状況を調べるため、博士号授与・研究大学図書館だけでなく、修士号・学士号授与大学図書館も調査対象に含める。サブジェクトライブラリアンの詳細な状況を把握するため、設置状況、各大学での人数、分野数等を調査する。また、サブジェクトライブラリアンの地位を確認するため、役職、部署、学歴等も調査する。

B. 調査方法

アメリカの大学図書館におけるサブジェクトラ

イブラリアンの設置状況を把握するために、各大学の Web サイトに記載されているサブジェクトライブラリアンリストの記載内容を調査する。サブジェクトライブラリアン、サブジェクトスペシャリスト等、第 I 章の定義に出てきた様々な名称を持つリストを調査した。サブジェクトライブラリアンであるかどうかの判断に迷ったものについては、主題を担当する図書館員の役割が蔵書構築等のテクニカルサービスとレファレンス等のパブリックサービスの両方を担当するものをサブジェクトライブラリアンと判断した。レファレンスライブラリアンが主題別に分かれているだけで、選書等に関わっていない場合は除外した。

本調査では、サブジェクトライブラリアンリスト掲載の有無を始点として調査を行う。実際にサブジェクトライブラリアンが存在するが、Web サイトにサブジェクトライブラリアンリストを掲載していない大学図書館は調査対象としない。

主な調査は 2011 年 7 月から 12 月の期間に行った。本研究の結果は、この時点での調査結果に基づく。

C. 調査対象

1. 博士号授与・研究大学図書館

博士号授与・研究大学図書館の調査対象は、ARL 加盟館とした。ARL はカーネギー分類⁷⁵⁾の博士号授与・研究大学の中でも非常に高いまたは高い研究活動を行っている大学であることが加盟の条件の一つになっている⁷⁶⁾ことから ARL 加盟館を調査対象に選択した。ARL 加盟館リスト⁷⁷⁾より、公共図書館およびカナダの図書館を除外した 98 館の大学図書館を抽出した。

2. 修士号・学士号授与大学図書館

調査対象は、カーネギー分類の 2010 年版の修士号授与大学 (Master's Colleges and Universities) および学士号授与大学 (Baccalaureate Colleges) から、それぞれ 98 校をランダム抽出した⁷⁸⁾。抽出数は、博士号授与・研究大学と同数の 98 とした。全大学数からの抽出割合は修士号授与大学が 13.5%、学士号授与大学が 12.1% となった (第 2

第 2 表 修士号・学士号授与大学図書館調査対象

カーネギー分類	大学数	抽出数	割合
修士号授与大学 Master's Colleges and Universities	727	98	13.5%
学士号授与大学 Baccalaureate Colleges	808	98	12.1%

表)。

D. 調査項目

調査は三段階に分けて行った。

①サブジェクトライブラリアンリストの有無

②現状調査: 名称, 分野数, 人数, 役割, 個人プロフィールの有無

③個人プロフィール調査: 部署, 役職, 学歴 (博士号授与・研究大学図書館のみ)

まず、各大学図書館 Web サイトを閲覧し、①サブジェクトライブラリアンリストの有無を確認する。リストが存在した場合は、②現状調査を行う。現状調査においては、サブジェクトライブラリアンに該当する名称, 分野数, 人数を確認する。役割の記載があった場合は、記載内容を調査する。

また、博士号授与・研究大学図書館については、サブジェクトライブラリアンの個人のプロフィールの調査を行う。サブジェクトライブラリアンリストに個人プロフィールが記載されている場合があるので、その有無を確認する。個人プロフィールの記載があった場合は、③個人プロフィール調査を行う。個人プロフィール調査では、部署, 役職, 学歴の調査を行った。

E. 調査結果

1. サブジェクトライブラリアンリストの掲載

博士号授与・研究大学図書館では、98 館中 90 館 (91.8%) の Web サイトに、サブジェクトライブラリアンリストの掲載が見られた。博士号授与・研究大学図書館の大半にサブジェクトライブラリアンが設置されているといえる。修士号授与大学図書館では約半数の 46 校 (46.9%) にサブジェクトライブラリアンリストの掲載が見ら

れた。学士号授与大学図書館では17校(17.3%)だったので、サブジェクトライブラリアンの設置は一般的でないといえるが、設置しているところもあることがわかった。年に多数の博士号や修士号を授与する大規模な大学の図書館であるほど、サブジェクトライブラリアンリストの掲載が多かった(第3表)。

修士号授与大学図書館と学士号授与大学図書館についてはさらに規模や種類別に集計した。修士号授与大学は、カーネギー分類において、2008年から2009年の修士号授与数によって、Master's L(修士号授与数が200以上)、Master's M(同100~199)、Master's S(同50~99)に分かれている。

Master's Lは35校(56.5%)の図書館Webページにサブジェクトライブラリアンリストが掲載されていた。Master's MとMaster's Sはそれぞれ9校(37.5%)、2校(16.7%)であり、規模が小さいほど、掲載数が少なかった(第4表)。

学士号授与大学は、カーネギー分類ではUndergraduate(学部)の学位のうち、10%以上が学士号(Bachelor's Degree)の大学と定義され、

第3表 サブジェクトライブラリアンリストの掲載

種類	掲載あり	掲載なし	合計
博士号授与・研究図書館	90 (91.8%)	8 (8.2%)	98 (100%)
修士号授与大学図書館	46 (46.9%)	52 (53.1%)	98 (100%)
学士号授与大学図書館	17 (17.3%)	81 (82.7%)	98 (100%)

第4表 サブジェクトライブラリアンリストの掲載(修士号授与大学図書館)

カーネギー分類	掲載あり	掲載なし	合計
Master's L	35 (56.5%)	27 (43.5%)	62 (100%)
Master's M	9 (37.5%)	15 (62.5%)	24 (100%)
Master's S	2 (16.7%)	10 (83.3%)	12 (100%)
合計	46 (46.9%)	52 (53.1%)	98 (100%)

その中でArts & Sciences(学士号の半数以上がArts & Sciences分野)、Diverse Fields(多様な分野)、Associate's Colleges(学士号授与が10%以上であるが半数以下)に分けられている。

この分類に沿って集計したところ、Arts & Sciencesは14校(56%)にサブジェクトライブラリアンリストが掲載されていたが、Diverse Fieldsは3校(5.8%)、Associate's Collegesでは掲載がなかった(第5表)。

2. 人数・分野数

サブジェクトライブラリアンの平均人数は、大規模な大学図書館ほど多かった(第6表)。人数の最小値は変わらなかったが、最大値に差が出た。

分野においても大規模な図書館ほど、数が多かった。大学によって分野の記載方法が異なり、理工学、社会科学、人文科学等に大きく分野を分けたものから、生物学(Biological Sciences)を進化生態学(Evolution and Ecology)、微生物学(Microbiology)、分子細胞生物学(molecular and

第5表 サブジェクトライブラリアンリストの掲載(学士号授与大学図書館)

カーネギー分類	掲載あり	掲載なし	合計
Arts & Sciences	14 (56.0%)	11 (44.0%)	25 (100%)
Diverse Fields	3 (5.8%)	49 (94.2%)	52 (100%)
Associate's Colleges	0 (0%)	21 (100%)	21 (100%)
合計	17 (17.3%)	81 (82.7%)	98 (100%)

第6表 大学の種別によるサブジェクトライブラリアンの人数

種類	平均値	最大値	最小値	中央値
博士号授与・研究図書館(n=90)	30.3	70	5	27
修士号授与大学図書館(n=46)	10.5	34	4	8
学士号授与大学図書館(n=17)	7.6	14	4	7

アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアン

cellular biology) 等かなり細かく分けている大学まで様々であり、最大は321分野であった(第7表)。

サブジェクトライブラリアン1人あたりが担当する分野数の平均は、博士号授与・研究大学図書館においては3.0分野であったが、修士号および学士号授与大学図書館においてはそれぞれ3.6分野、3.7分野と若干多い結果となった(第8表)。

博士号授与・研究大学図書館においてはARL Statisticsのプロフェッショナルスタッフの数値⁷⁹⁾から、サブジェクトライブラリアンの割合を出した。プロフェッショナルスタッフのうち、約30%がサブジェクトライブラリアンの役割を負っている(第9表)。

3. 名称

博士号授与・研究大学図書館においては、サブジェクトライブラリアンとサブジェクトスペシャリストの名称の使用がほぼ二分する形で大部分を占めたが、修士号および学士号授与大学図書館は

第7表 大学の種別によるサブジェクトライブラリアンの分野数

種類	平均値	最大値	最小値	中央値
博士号授与・研究図書館 (n=90)	90.9	321	5	102
修士号授与大学図書館 (n=46)	38.2	117	10	34.5
学士号授与大学図書館 (n=17)	27.7	46	5	31

第8表 大学の種別によるサブジェクトライブラリアン1人あたりの分野数

種類	平均値
博士号授与・研究図書館 (n=90)	3.0
修士号授与大学図書館 (n=46)	3.6
学士号授与大学図書館 (n=17)	3.7

第9表 プロフェッショナルスタッフ中のサブジェクトライブラリアンの割合

種類	平均値	最大値	最小値	中央値
博士号授与・研究図書館 (n=90)	29.6%	80.0%	9.6%	30.9%

リエゾンを含む名称の使用が大部分を占め、博士号授与・研究大学図書館と、修士号および学士号授与大学図書館の間に明確な違いがあった(第10表)。

4. 役割

博士号授与・研究大学図書館においては、蔵書構築、図書館利用教育、レファレンス・研究支援の役割がどの大学においても高い割合で記載されていたが、修士号および学士号授与大学図書館においては、蔵書構築に重点が置かれていた(第11表)。

博士号授与・研究大学図書館では、サブジェクトライブラリアンの役割については、40館に記載があった。蔵書構築は38館(95.0%)とほぼすべてに記載があり、図書館利用教育や、レファレンス・研究支援も、それぞれ37館(92.5%)、33館(82.5%)と多くの館において記載があった。

記載の内容を見ると、蔵書構築には、研究や教

第10表 大学の種別によるサブジェクトライブラリアンの名称

名称	博士 (n=90)	修士 (n=46)	学士 (n=17)
サブジェクトライブラリアン	44.3%	13.0%	0%
サブジェクトスペシャリスト ¹⁾	42.2%	4.3%	0%
リエゾンライブラリアン ²⁾	15.6%	80.4%	82.4%
ビブリオグラファー ³⁾	2.2%	2.2%	0%
その他	10.0%	4.3%	17.6%

¹⁾ サブジェクトスペシャリストライブラリアンを含む

²⁾ リエゾン、ライブラリーリエゾン、サブジェクトリエゾン、デパートメンタルリエゾン、ファカルティリエゾン、アカデミックリエゾンを含む

³⁾ サブジェクトビブリオグラファーを含む

第11表 大学の種別によるサブジェクトライブラリアンの役割

役割	博士 (n=40)	修士 (n=15)	学士 (n=5)
蔵書構築	95.0%	93.3%	80.0%
図書館利用教育	92.5%	40.0%	40.0%
レファレンス・研究支援	82.5%	53.3%	60.0%

育に適した資料の選択、購入リクエストの受付、電子情報源や Web リソースの選択と評価などの記載を含んでいた。サブジェクトライブラリアンは、印刷体だけでなく電子資料についても担当していた。

図書館利用教育には、個人、グループ、授業での図書館利用および情報資源利用教育の役割を含めた。図書館資料の検索や利用についてのクラスの提供、コースガイドの作成等を担当していた。各コースや主題ごとの文献の探し方、Web 資料を含めた文献リスト等が記載されたコースガイドやサブジェクトガイド、LibGuides 等には、博士号授与・研究大学図書館のうち 55.6%のサブジェクトライブラリアンリストからリンクが貼られていた。

レファレンス・研究支援には、専門分野に関するレファレンスサービスや研究相談、研究トピックのアドバイス、検索戦略のデザイン等の研究支援の役割を含めた。サブジェクトライブラリアンは、オフィスアワーや電子コミュニケーション等様々な方法によって研究相談等を担当している。上級のレファレンス、専門的なレファレンスや研究相談、研究指導等、研究支援の役割が多く記載されていた。

リエゾンについてもいくつかのサイトに記載があった。リエゾンは学科や研究機関との連絡係であり、図書館コレクションやリサーチツール、サービスの情報提供等の役割が記載されていた。図書館委員会の開催や、学科のミーティングへの参加が記載されており、教員と密接に関わっていることが示されていた。

修士号授与大学図書館では、15 館に役割の記載があった。1 館を除いた 14 館で、教員からの資料購入依頼や、教員と共同で行う蔵書構築の役割について記載されていた。レファレンス・研究支援については 8 館 (53.3%)、図書館利用教育については 6 館 (40.0%) に記載があり、オンライン検索ツールやコースページの作成等の役割が記載されていた。

学士号授与大学図書館では、5 館に役割の記載があった。1 館を除いた 4 館で、教員からの資料

購入依頼や、教員と共同で行う蔵書構築の役割について記載されていた。レファレンス・研究支援については 3 館 (60.0%)、図書館利用教育については 2 館 (40.4%) に記載があった。

5. 個人プロフィール調査

博士号授与・研究大学図書館のサブジェクトライブラリアンリストに記載されているサブジェクトライブラリアン名から、詳細な個人プロフィールにリンクがある 16 館、438 名を対象とした (第 12 表)。本調査では学歴の調査に重点を置いているので、各大学図書館のサブジェクトライブラリアンリストページにおいて、大部分の個人プロフィールに学歴の記載がある図書館のみを調査対象とした。

a. 所属部署・役職

図書館によって部署名の記載方法にかなりの違いがあったので、所属部署 (一部は担当業務) より、テクニカルサービス、パブリックサービス、管理部門、専門図書館に分けた。

第 12 表 個人プロフィール調査対象館

大学図書館名	人数
1 Brown university Library	17
2 Cornell University Library	52
3 Georgetown University Library	16
4 Georgia Tech Library and Information Center	16
5 Massachusetts Institute of Technology Libraries	27
6 Texas A&M University Libraries	36
7 University at Albany, SUNY, Libraries	14
8 University at Buffalo, SUNY, Libraries	42
9 University of California, Irvine Libraries	19
10 University of Georgia Libraries	19
11 University of Miami Libraries	15
12 University of Missouri-Columbia Libraries	22
13 University of Nebraska-Lincoln Libraries	44
14 University of Oregon Libraries	24
15 University of Pennsylvania Libraries	39
16 University of Texas Libraries	36
合計	438

アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアン

中央館に該当する館に所属するサブジェクトライブラリアンは、所蔵部署より、テクニカルサービス (Collections, Scholarly Resources, Computing Operations 等) パブリックサービス (Reference, Research, Instruction, Outreach 等)、管理部門 (Dean's Office 等) に分け、部門図書館 (Law Library, Music Library, Health Sciences Library 等) に所属するサブジェクトライブラリアンは、その担当業務にかかわらず、専門図書館に分類した。

調査したすべての大学図書館において、複数部署にサブジェクトライブラリアンが配置されていた。パブリックサービスに配置されたサブジェクトライブラリアンは175名 (40.0%) と最も多かった (第13表)。先に紹介した ARL の2007年の調査においても、パブリックサービス担当がリエゾンの役割を負う最大のグループである⁶³⁾ という結果がでており、本調査の結果と一致する。

役職については、Associate Librarian (副館

長), Department Head (部局長), Director に部署名を加えたもの (部長) 等の管理職と思われるものが114名に記載があった。またネブラスカ大学リンカーン校およびオレゴン大学図書館では、Professor (教授), Associate Professor (准教授), Assistant Professor (助教) 等の教員職の記載があり、2名を除く全員に記載があった。

b. 学歴

調査対象438名のうち、308名 (70.3%) に取得学位の記載があった。図書館学 (図書館情報学を含む) の学位および主題の学位を分けて集計した (第14表)。図書館情報学の学位を持つサブジェクトライブラリアンは272名 (88.3%) であり大部分を占めた。図書館学の学位に加えて主題の学位を持つサブジェクトライブラリアンは博士号36名 (11.7%), 修士号104名 (33.8%), 学士号102名 (33.1%) であった。図書館学と主題両方の修士号を持つダブルマスターのサブジェクトライブラリアンと、図書館学の修士号および主題の学士号を持つサブジェクトライブラリアンがほぼ同数であった。

第13表 担当部署

担当部署	人数	割合
パブリックサービス	175	40.0%
テクニカルサービス	131	29.9%
管理部門	17	3.9%
専門図書館	115	26.3%
合計	438	100%

IV. まとめ

A. アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアンの特徴

1. 導入および定着の理由と役割

アメリカにおけるサブジェクトライブラリアン

第14表 取得学位

図書館学の学位	主題の学位	人数	割合	合計人数	合計割合
博士号	記載なし	1	0.3%	272	88.3%
修士号 ¹	博士号	36	11.7%		
	修士号	104	33.8%		
	学士号	102	33.1%		
	記載なし	29	9.4%	36	11.7%
記載なし	博士号	18	5.8%		
	修士号	17	5.5%		
	学士号	1	0.3%		
合計	合計	308	100%	308	100%

¹ 図書館学修士号 (Master of Library Science: MLS, Master of Arts in Library Science 等) や図書館情報学修士号 (Master of Library and Information Science: MLIS, Master of Science in Library and Information Science: MSLIS 等) の様々な表記のものを含む

の導入理由は、主題部門制の導入や地域研究の必要性であり、社会や大学から必要とされ導入されたものであった。もともとは主に目録、分類、レファレンスを行うためにサブジェクトライブラリアンが雇用されていたが、1960年頃、出版数の増加や複雑化により選書の時間がなくなった教員から、図書選択の役割が移行された。選書の役割を担うことにより、サブジェクトライブラリアンは確固たる地位を築いた。

選書の役割が加わって以降はどの時代においても、サブジェクトライブラリアンの主な役割は、蔵書構築、レファレンス・研究支援、図書館利用教育であり、第III章の現状調査においても同様であった。1980年代以降の電子化、インターネットの普及によって、扱う媒体が印刷体だけでなく電子資料も含むようになり、学術的なアドバイザーや知識ガイドとしての新しい役割を持つようになった。時代に沿った役割を果たすことにより、サブジェクトライブラリアンが活躍し続けている。

役割において特徴的なのがリエゾンであり、蔵書構築、レファレンス・研究支援、図書館利用教育等の役割において、教員との密接な関係を持つ。教員からの選書の移行もあり、サブジェクトライブラリアンは、初期の頃から教員との関連が密接であった。利用者への売り込み (Sales)⁶⁴という言葉も使われているように、かなり積極的な活動をしていると考えられる。サブジェクトライブラリアンは自身が持つ主題や図書館学の知識によって教員と密接な関係を作ることによりその地位を定着させた。

アメリカのサブジェクトライブラリアンはダブルマスターを取得しているというイメージがあるが、III章の実態調査では、MLSに加えて持つ主題の学位が学士号であるサブジェクトライブラリアンが1/3程度であった。II章の求人広告の調査でも明らかになっているように、学歴には様々なパターンがあるが、MLSは重要視されており、ほとんどの求人広告で求められていて、実際のサブジェクトライブラリアンの多くも取得している。

2. 大規模大学と中小規模大学との比較

博士号授与・研究大学図書館のほとんどにサブジェクトライブラリアンが設置されていたが、修士号授与大学図書館では半数程度、学士号授与大学図書館では17.3%にサブジェクトライブラリアンが設置されていた。博士号や修士号を多数授与する大規模な大学図書館ほど、サブジェクトライブラリアンの設置が多いことが明確になった。博士号授与・研究大学図書館においては、サブジェクトライブラリアンやサブジェクトスペシャリストと呼ばれる図書館員が、多くの分野において蔵書構築、図書館利用教育、レファレンス、研究支援を行っているが、修士号および学士号授与大学図書館においては、リエゾンの名称を持つ図書館員が、教員との連携により蔵書構築を中心に役割を果たしているという違いが見られた。リエゾンの場合、サブジェクトライブラリアン等よりも主題に関する知識を問われることが少ないので、1人あたりが担当する分野数が博士号授与・研究大学図書館と比較して、修士号および学士号授与大学図書館の方が若干多くなったと思われる。

サブジェクトライブラリアンは博士号授与・研究大学図書館等大規模な図書館特有のものであり、博士号授与・研究大学図書館に比べて小規模な図書館では、サブジェクトライブラリアンよりは主題の知識は少ないが教員と密接に働いてリエゾンライブラリアンが中心に活躍しているといえる。

B. 日本の大学図書館への示唆

アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアンは、Haskellによると、教員の反対も少なく、あまり困難なこともなく確立したという¹⁰。しかし、現在の日本の大学図書館の状況を見ると、予算の削減や専任職員員の減少、電子ジャーナルの価格高騰による資料費の圧迫など、当時のアメリカの状況とは全く違う。このような中で、日本においてサブジェクトライブラリアンを導入することは困難を伴うであろう。そもそも、日本におけるサブジェクトライブラリアンの導入には、人事や養成において課題がある。前に

述べたとおり、日本においても戦前から医学・薬学・法学等の学部図書館にはサブジェクトライブラリアンが存在したが、ふさわしい処遇が与えられることはなかった。サブジェクトライブラリアンのような教育や研究と密接に関わる業務を行う者は、従来の事務職員とは区別して位置付けを検討していく必要がある⁶⁾。国立大学においては検討がなされているが、賛否が分かれ、一大学や小規模校で行うことは困難である、流動性の確保等の方策を講じなければますます学内での孤立化が進行するというような、否定的な意見も挙がっており⁸⁰⁾、事務職員とは異なった枠組みで考えることは容易でない。養成においては、アメリカの専門職の大学図書館員は、ライブラリースクールで学びMLSを取得することが前提となっており、学部レベルの司書課程中心の日本とは大きく違うことは明らかである。

本研究では、サブジェクトライブラリアンが博士号授与・研究大学図書館のような大規模特有のものなのか、という疑問から、修士号および学士号授与大学図書館の調査を行った。その結果から、修士号および学士号授与大学図書館では、リエゾンライブラリアンとして教員との密接な結びつきを持つ図書館員が多数存在することが分かった。サブジェクトライブラリアンほどの主題の知識は問われないので、日本においても担当部署を問わずリエゾンライブラリアンを任命することにより、人事や養成の問題を超えて導入することが可能であると考ええる。ただし、日本の現状においては、現行の人事制度を変更せずにリエゾンサービスに取り組むことになり、リエゾンライブラリアンに人事異動や給与等の人事面での特別な処遇を与えることは難しいであろう。リエゾンライブラリアンという職種が成立するのではなく、その時々担当者がリエゾンサービスを実施する、ということになるであろう。しかし、教員と密接な結びつきを持ち、蔵書構築や教育研究支援において図書館員が効果的に働くことができれば、リエゾンライブラリアンという職種ができる可能性もあり、図書館員の地位の向上にもつながると考える。すでに千葉大学でのリエゾンライブラリア

ン³⁷⁾や法政大学でのゼミサポート制⁸¹⁾においての実績にも現れているように、日本において図書館員が主題ごとの担当を持って働くには、リエゾンライブラリアンを導入するのも一案であろう。

導入を検討するにあたっては、サブジェクトライブラリアンやリエゾンライブラリアンの概念を明確化する必要がある。アメリカでは主題部門制が発端であることから、人文科学、社会科学、科学技術のような広い分野を担当することから始まっているが、現在では大学によって分野数にかなり幅があり、人数やサービス内容も多岐に渡る。各大学でのミッションを踏まえ、どの程度の分野数にするのか、どの分野を取り上げるのか、どのようなサービスを行うのか、具体化した上で検討していく必要があるのではないかと考える。日本に必要とされるサブジェクトライブラリアンを考える際に、様々な規模で様々なサービスを行っているアメリカのサブジェクトライブラリアンの例が参考になるのではないかと考える。

謝 辞

本論文は、慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻情報資源管理分野に提出した2011年度修士論文をもとにしたものです。執筆にあたってご指導いただいた慶應義塾大学文学部上田修一教授（当時、現在は慶應義塾大学名誉教授）に深く感謝いたします。さらに、査読者、編集委員の皆様からは、多くの貴重なご意見をいただきました。厚く御礼申し上げます。

注・引用文献

- 1) 日本図書館研究会編集委員会編、構造的転換期にある図書館：その法制度と政策、日本図書館研究会、2010、277p.
- 2) 学術審議会学術情報分科会、学術情報の流通体制の改善について（報告）、学術審議会学術情報分科会、1973、74p.
- 3) 学術審議会、今後における学術情報システムの在り方について（答申）、学術審議会、1980、12p.
- 4) 学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会、大学図書館機能の強化・高度化の推進について（報告）、1993。http://www.soc.nii.ac.jp/anul/j/documents/mext/houkoku.html、（入手2011-01-23）。

- 5) 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会・学術情報基盤作業部会. 学術情報基盤の今後の在り方について(報告). 2006. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015.htm, (入手 2011-03-21).
- 6) 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会. 大学図書館の整備について(審議のまとめ). 2010. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm, (入手 2011-03-21).
- 7) 呑海沙織. 大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの可能性. 情報の科学と技術. 2004, vol. 54, no. 4, p. 190-197.
- 8) 呑海沙織. サブジェクト・ライブラリアンの役割の変化: 1940年代以降の英国大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアン. 情報学. 2007, vol. 4, no. 1, p. 1-11.
- 9) Hay, Fred J. The subject specialist in the academic library: A review article. *Journal of Academic Librarianship*. 1990, vol. 16, no. 1, p. 11-17.
- 10) Haskell, John D. Jr. "Subject bibliographers in academic libraries: An historical and descriptive review". *Advances in Library Administration and Organization*. vol. 3, JAI Press, 1984, p. 73-84.
- 11) Humphreys, Kenneth. The subject specialist in national and university libraries. *Libri*. 1967, vol. 17, no. 1, p. 29-41.
- 12) "主題専門員". *ALA 図書館情報学辞典*. 丸善, 1988, p. 104.
- 13) "Subject librarian". *International Encyclopedia of Information and Library Science*. 2nd ed, Routledge, 2003, p. 624.
- 14) "主題資料専門家". *図書館情報学用語辞典*. 第3版, 丸善, 2007, p. 102.
- 15) "liaison". *Dictionary for Library and Information Science*. Libraries Unlimited, 2004, p. 402.
- 16) "subject specialist". *Dictionary for Library and Information Science*. Libraries Unlimited, 2004, p. 692.
- 17) 藤田豊. サブジェクト・スペシャリスト. *図書館雑誌*. 1967, vol. 61, no. 2, p. 28-31.
- 18) 菊池しづ子. 大学図書館における主題専門図書館員. *Library and Information Science*. 1977, no. 15, p. 85-95.
- 19) 加藤修子. 大学図書館における主題専門図書館員と主題専門教育. *Library and Information Science*. 1992, no. 30, p. 93-113.
- 20) 及川三千男. イギリス大学図書館におけるサブジェクトスペシャリストについて. *図書館学研究報告*. 1976, no. 9, p. 316-326.
- 21) 斎藤陽子. 英国の大学図書館における主題専門制. *社会教育学・図書館学研究*. 1989, no. 13, p. 31-42.
- 22) 岩猿敏生ほか. 大学図書館の管理と運営. *日本図書館協会*, 1992, 247p.
- 23) 松林正己. 続図書館はだれのものか: 図書館の未来を求めて. *中部大学*, 2010, 107p. (中部大学ブックシリーズ, 13).
- 24) 国立大学法人化後を見据えた大学図書館経営について: 第16回国立大学図書館協議会シンポジウム. *大学図書館研究*. 2004, no. 71, p. 63-72.
- 25) 有川節夫. 国立大学図書館の課題と解決の試み. *大学図書館研究*. 2004, no. 70, p. 1-8.
- 26) 長坂みどり. 特集, 国立大学法人化: 国立大学の法人化と図書館職員. *情報の科学と技術*. 2005, vol. 55, no. 12, p. 534-540.
- 27) 呑海沙織. 特集, 知のネットワークにおける図書館の機能: 大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアン. *WEB 大学出版*. 2005, no. 64. http://www.ajup-net.com/web_ajup/064/64T3.html, (入手 2012-01-05).
- 28) 呑海沙織. 講演 サブジェクト・ライブラリアンと大学図書館 (2007年度 [私立大学図書館協会] 東地区部会 研究講演会). *私立大学図書館協会会報*. 2008, no. 130, p. 90-94.
- 29) 特集, サブジェクトライブラリアンは必要か. *情報の科学と技術*. 2005, vol. 55, no. 9, p. 361-397.
- 30) 櫻田忠衛. ドキュメンタリストの役割と課題: 経済資料協議会の業績からサブジェクトライブラリアンを考える. *経済資料研究*. 2007, vol. 37, p. 35-45.
- 31) 諏訪部直子. 特集, サブジェクトライブラリアンは必要か: 医学情報専門家としての医学図書館員の新しい役割. *情報の科学と技術*. 2005, vol. 55, no. 9, p. 369-374.
- 32) 加藤裕子. 特集, サブジェクトライブラリアンは必要か: 特徴的主题分野における活動: リーガルライブラリー: 法律研究所の図書館業務と法科大学院における研究支援. *情報の科学と技術*. 2005, vol. 55, no. 9, p. 375-380.
- 33) 飯野弘之, 笹覚暁. サブジェクトライブラリアンの重要性. *情報管理*. 1999, vol. 41, no. 10, p. 766-779.
- 34) "2011年度『館長懇話会』要旨". 私立大学図書館協会西地区部会. <http://www.jaspul.org/west/west-konwakail1-02.pdf>, (入手 2012-01-22).
- 35) "専門助手がレファレンスカウンターでご相談に応じます". 一橋大学附属図書館. <http://www.lib.hit-u.ac.jp/guide/reference/subjectlibrarian.html>, (入手 2011-05-01).
- 36) "サブジェクト・ライブラリアン(一橋大学の事例)". 文部科学省. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/

- afieldfile/2011/01/21/1301671_031.pdf, (入手 2012-01-22).
- 37) 金山亮子, 武内八重子. 日本におけるリエゾン・ライブラリアン: 千葉大学附属図書館の挑戦. 専門図書館. 2007, no. 222, p. 15-20.
 - 38) “ライブラリーサイエンス専攻: 九州大学大学院統合新領域学府”. 九州大学. http://ss.ifs.kyushu-u.ac.jp/?page_id=23, (入手 2012-01-22).
 - 39) 薬師院はるみ. 特集, サブジェクトライブラリアンは必要か: サブジェクトライブラリアンとは何か: その導入がもたらすもの. 情報の科学と技術. 2005, vol. 55, no. 9, p. 362-368.
 - 40) Smith, Eldred. “The impact of the subject specialist librarian on the organization and structure of the academic research library”. The Academic Library: Essays in Honor of Guy R. Lyle. Farber, E. I.; Walling, R. Scarecrow Press, 1974, p. 71-81.
 - 41) Rothstein, Samuel. レファレンス・サービスの発達. 長沢雅男ほか訳. 日本図書館協会, 1979, 256p.
 - 42) Duino, Russell. The role of the subject specialist in British and American university libraries: A comparative study. Libri. 1979, vol. 29, no. 1, p. 1-19.
 - 43) Johnson, Edward R. Subject-divisional organization in American university libraries, 1939-1974. Library Quarterly. 1977, vol. 47, no. 1, p. 23-42.
 - 44) Downs, Robert B. Preparation of specialists for university libraries. Special Libraries. 1946, vol. 37, September, p. 209-213.
 - 45) Fussler, Herman H. The bibliographer working in a broad area of knowledge. College and Research Libraries. 1949, vol. 10, no. 3, p. 199-202.
 - 46) Chapman, John D. The role of the divisional librarian. College and Research Libraries. 1954, vol. 15, no. 2, p. 148-154.
 - 47) Stueart, Robert D. The Area Specialist Bibliographer: An Inquiry Into His Role. Scarecrow Press, 1972, 152p.
 - 48) Byrd, Cecil K. Subject specialist in a university library. College and Research Libraries. 1966, vol. 27, no. 3, p. 191-193.
 - 49) Danton, J. Periam. The subject specialist in national and university libraries, with special reference to book selection. Libri. 1967, vol. 17, no. 1, p. 42-58.
 - 50) Haro, Robert P. The bibliographer in the academic library. Library Resources and Technical Services. 1969, vol. 13, no. 2, p. 163-169.
 - 51) Tuttle, Helen Welch. An acquisitionist looks at Mr. Haro’s bibliographer. Library Resources and Technical Services. 1969, vol. 13, no. 2, p. 170-174.
 - 52) McNeal, Archie L. Changing personnel patterns in college and university libraries. Missouri Library Association Quarterly. 1969, vol. 30, no. 2, p. 159-166.
 - 53) Coppin, Ann. The subject specialist in the academic library staff. Libri. 1974, vol. 24, p. 122-128.
 - 54) Haro, Robert P. Book selection in academic libraries. College and Research Libraries. 1967, vol. 28, no. 2, p. 104-106.
 - 55) Hazen, Dan. Twilight of the gods? Bibliographers in the electronic age. Library Trends. 2000, vol. 48, no. 4, p. 821-841.
 - 56) Gratton, Selby U.; Young, Arther P. Reference bibliographers in the college library. College and Research Libraries. 1974, vol. 35, no. 1, p. 28-34.
 - 57) Messick, Frederic M. Subject specialists in smaller academic libraries. Library Resources and Technical Services. 1977, vol. 21, no. 4, p. 368-374.
 - 58) Dickinson, D. W. “Subject specialists in academic libraries: The once and future dinosaurs”. New Horizons for Academic Libraries. Stueart, Robert D.; Johnson, Richard David. K. G. Saur Pub., 1979, p. 438-444.
 - 59) Haar, John. Scholar or librarian? How academic libraries’ dualistic concept of the bibliographer affects recruitment. Collection Building. 1993, Vol. 12, no. 1/2, p. 18-23.
 - 60) Welch, Jeanie M. Hey! What about us?! Changing roles of subject specialists and reference librarians in the age of electronic resources. Serials Review. 2002, vol. 28, no. 4, p. 283-286.
 - 61) Andrade, Ricardo.; Zaghoul, Raik. Restructuring liaison team at the University of Arizona Libraries, 2007-2009. New Library World. 2010, vol. 111, no. 7/8, p. 273-286.
 - 62) Systems and Procedures Exchange Center. Liaison Services in ARL Libraries. Association of Research Libraries, Office of Management Services, 1992, v. 183 p. (SPEC kit, 189).
 - 63) Logue, Susan. et al. Liaison Services. Association of Research Libraries, 2007, 169p. (SPEC kit, 301).
 - 64) Sandhu, Sarbjit S. The role of subject specialist in a university library. Unesco Bulletin for Libraries. 1975, vol. 29, March-April, p. 64-67.
 - 65) Michalak, Thomas J. Library services to the graduate community: The role of the subject specialist librarian. College and Research Librar-

- ies. 1976, vol. 37, no. 3, p. 257-265.
- 66) Feldmann, Louise. Subject librarians in the changing academic library. *The Electronic Journal of Academic and Special Librarianship*. 2006, vol. 7, no. 3, http://southernlibrarianship.icaap.org/content/v07n03/feldmann_l01.htm, (accessed 2012-01-15).
- 67) RUSD Guidelines for liaison work. *RQ*. 1992, vol. 32, no. 2, p. 198-204.
- 68) Liaison with Users Committee, Collection Development and Evaluation Section, Reference and User Services Association. Guidelines for liaison work in managing collections and services. *Reference & User Services Quarterly*. 2001, vol. 41, no. 2, p. 107-109.
- 69) Reference and User Services Association. "Guidelines for liaison work in managing collections and services". Reference and User Services Association. 2010. <http://www.ala.org/rusa/sites/ala.org/rusa/files/content/resources/guidelines/liaison-guidelines-3.pdf>, (accessed 2012-01-15).
- 70) Lundy, Frank A. Library service to undergraduate college students: The divisional plan library. *College and Research Libraries*. 1956, vol. 17, no. 2, p.143-148.
- 71) Detlefsen, E. G. Specialists as professionals in research libraries: An overview of trends and an analysis of job announcements. *Library Trends*. 1992, vol. 41, no. 2, p. 187-197.
- 72) White, Gary W. Academic subject specialist positions in the United States: A content analysis of announcements. *Journal of Academic Librarianship*. 1999, vol. 25, no. 5, p. 372-382.
- 73) McAbee, Sonja L.; Graham, John-Bauer. Expectations, realities, and perceptions of subject specialist librarians' duties in medium-sized academic libraries. *Journal of Academic Librarianship*. 2005, vol. 31, no. 1, p. 19-28.
- 74) Stacy-Bates, Kristine K., et al. Competencies for bibliographers: A process for writing a collection development competencies document. *Reference and User Services Quarterly*. 2003, vol. 42, no. 3, p. 235-241.
- 75) Classification Description. Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching. <http://classifications.carnegiefoundation.org/descriptions/basic.php>, (accessed 2012-01-15).
- 76) About ARL: Membership: Principles of Membership in the Association of Research Libraries. Association of Research Libraries. 2001-02-08. <http://www.arl.org/arl/membership/qualprin.shtml>, (accessed 2011-01-10).
- 77) About ARL: Membership: Member Libraries. Association of Research Libraries. <http://www.arl.org/arl/membership/members.shtml>, (accessed 2011-03-01).
- 78) Standard Listings. Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching. http://classifications.carnegiefoundation.org/lookup_listings/standard.php, (accessed 2011-7-16) の Basic classification に掲載されている。Master's Colleges and Universities の larger programs, medium programs, smaller programs および, Baccalaureate Colleges の Arts & Sciences, Diverse Fields, Baccalaureate/Associate's Colleges のリストをダウンロードし、ランダム抽出した。
- 79) Kyrillidou, Martha et al., eds. *ARL Statistics 2010-2011*. Association of Research Libraries, 2012, 180p.
- 80) 国立大学図書館協会人材委員会. "図書館職員の人事政策課題について (提言)". 国立大学図書館協会. 2012-03. <http://www.janul.jp/j/projects/hr/jinjiseisakukadai.pdf>, (参照 2013-08-10).
- 81) "図書館の取り組み". 法政大学. http://www.hosei.ac.jp/kyoiku_kenkyu/kyoiku_proj/tosho-kan.html, (入手 2012-01-20).

要 旨

【目的】 本研究では、アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアンの導入経緯と定着の理由、その後の推移を調査し歴史的経緯を明らかにするとともに、サブジェクトライブラリアンの役割および、普及状況や導入状況を明らかにすることを目的とする。

【方法】 サブジェクトライブラリアンおよびその同義語をキーワードとして文献調査を行い、歴史的経緯を明らかにした。現在の状況については、Web ページに掲載されたサブジェクトライブラリアンのリストを調査し、各大学の導入状況（名称、人数、分野数、役割）や、個人の情報（地位、部署、経歴）を調査し、大学の種類による違いを比較した。

【結果】 アメリカの大学図書館では、主題部門制の導入および地域研究の必要性をきっかけにサブジェクトライブラリアンが本格的に導入され、戦後の学生数や出版数の増加による教員から図書館員への選書の役割の移行により 1960 年代までにサブジェクトライブラリアンが定着したことが明らかになった。サブジェクトライブラリアンの主な役割は、蔵書構築、レファレンス・研究支援、図書館利用教育、リエゾンサービスであり、1980 年代以降はオンライン化や電子情報源の登場により、これらの役割に電子情報源の選択やチャットレファレンスなどが加わった。大規模な大学図書館ではほとんどの図書館においてサブジェクトライブラリアンが設置されていたが、中小規模の大学図書館では、サブジェクトライブラリアンではなく、担当する学科への支援を中心に行うリエゾンライブラリアンを設置している傾向が見られた。